
愛犬 トモ

土堀 友

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛犬 トモ

【Nコード】

N7638H

【作者名】

土堀 友

【あらすじ】

雑種の雄犬トモは、ご主人様と出会うが、アパート住いだっただけで、最初の数カ月には祖父の家で暮らすことになった。

出会い

第二章 老犬の遺言

一、出会い

私はトモと申します、友でもなければTOMOでもありません。雑種の雄犬ですが、自分の名前が犬らしくないと気にしているのでネーミングにはこだわっているのです。

ご主人様は静男と申します、「人生に勝負を賭ける、日本男児として一旗揚げるのだ」と雄叫びを上げ、三十五歳の時脱サラして商売を始めました。夢が実現したのです。ご主人様は「これで終わりではない、これからが勝負なのだ」と張り切っておりました。

お客様にクリーニング屋さんがあつて、そこで生まれたばかりの子犬、つまり私をもらってきたのです。事務所兼住宅を新築するに際し、犬でも飼うかと申したのが事の始まりですが、その時はまだアパートに住んでいたのです、私はご主人様の実家に少しの間お世話になる事になったのです。

全くそそっかしいご主人様ですので私も家族の一員となつてから色々々と苦労しましたが、その事は追いつ追いつお話しすることといたしましよう。

生まれたばかりの私は五匹兄弟の長男でした。皆はまだ母犬の傍におりましたが、私は段ボールの箱に入っており、クリーニング屋の奥様が、「洗っておいたのできれいですよ」と言つてご主人様に手渡しました。

帰りの道すがら、私はもらわれて行く淋しさや先行きの不安から、不覚にも段ボールの箱の中で脱糞してしまいました。車に揺られ、箱の中でゴロゴロと転がつたのでご主人様の実家に着いた頃にはも

うすつかりフンだらけとなり、この時ばかりは私も『万事休す』の心境でした。

実家は大きな母屋と祖父が経営していた古い工場、離れ等がありました。祖父・祖母の二人暮らしてました。

ご主人様には子供が無かったので、私は「よく来たね」とまるで孫が来たかのように可愛がられました。

ここで暮らした数カ月を、私は生涯忘れませんでした。なぜかって、犬は三日飼ったらその恩を一生忘れないと申しますでしょう。それだけで無く祖父と暮らした事が私を忘れ難いものとしたのです。

土埃ほこりの臭いが漂う工場は薄暗く、破れた窓にはベニヤ板がガラスの代わりに打ち付けられていました。紫色の光が壁の隙間からこぼれ入って塵埃ほこりを照らしています。祖父が最新式と自慢した機械もザツと三十年ほど昔のもので、見渡す限りこの工場には新しいものは何もありません。ただ、この工場は生気がみなぎっていて、経験豊富な祖父の腕一本で廻っているのです。

祖父は無口な人でどことなく寂しそうな雰囲気がありました。私が来てからは、かけがえのない友人に出会ったかのように「トモ、散歩に行くぞ、一緒に行くか」等と声をかけその様な影も気付かなくなりました。

或る日工場の隅にあった木箱に腰を掛け、私の耳元でボソボソと話し始めました。私は土間におすわりをしていましたが、木箱に跳び乗って祖父の膝ひざに顎あごを乗せ長い話を聞くことになりました。

祖父は「誰もワシの話など聞いてはくれんが」と前置きして、「ワシは戦争で運を全部使い果たしてしまつた。戦後の人生はお釣りのようなものだつた」と話を続けました。

戦争も負ける事が誰の目にも明らかになつた頃、本隊は南方に行つたが、ワシは東京を守る部隊に配属になつた。そして、世田谷という所にあつたお家に下宿することになった。そこは広いお屋敷で

はあるが母と若い娘の二人暮しであった。

お母様は「将校様がおいで下さって心強い」と大層喜んでくれた。とても上品なお方で、今でもはつきり覚えておるが、紺と白の縦縞の着物がよく似合う美人だった。ワシを娘の婿に迎えたいと申しとおった。

娘さんは丸顔で目がクリっとした、可愛い娘であった。ピアノが得意で、居間の中央には大きくて黒いピアノがあった。半月状の出窓にはいつも赤い薔薇の花が、コップのような花瓶に一輪差してあって、そのバラは何という名か知らんが、そうだな、光りが当たると黒っぽい赤色になって、不思議な気持ちで眺めていたものだった。そんな時ピアノの音が聞こえてきて、ファンタジーなひと時であった。

娘さんはワシの気を引く時はいつもその花を手で触れてワシの視線をそちらに向けさせていた。ワシもその事は分かっていたので、何気ない振りをして誘いに乗っていた。

娘さんはまんざらでも無さそうで、お手伝いさんがお茶を出すところを自分でわざわざ持ってきたりして、シヨパンがどうのこうのと勝手に話し始め、暫くすると「お邪魔してごめんなさい」とペコリとお辞儀をして部屋から出て行った。その去り際がとてもさわやかだった。

東京も空襲で焼け野原になり、その親子も長野かどっか遠い所へ疎開した。戦後になって消息を尋ねたが分からなかった。お屋敷の南側はすこし下った坂道になっており、その近くに煙草屋があった。そこのお婆さんが覚えていてくれたので、娘さんに土産を渡してもらいたいと頼んで故郷に帰ってきたが、かなり年月が経ってそのよくな事も忘れていた時、娘さんから便りがあった。

その手紙には、「コンパクトをいただきありがとうございます。とても嬉しかったです」とお礼が述べられており、お母様は亡くなった事、娘さんは遠縁の者と結婚したこと等が綴られていた。封筒の中には押し花が入っていたが、あの赤い花だった。

話が終わると祖父は立ち上がり汚れてもいないのにパンパンとズボンの埃を払うしぐさをして、「この話は内緒だよ、特に婆さんにはな」と申しました。私はズーと祖父の目を見ていましたが、一度目をそらし又見つめ直して「ニー」と笑い、さらにサービスとして尻尾を三回振りました。祖父の秘密を共有することで信頼関係がより強まったと感じたからです。祖父は「ベリーグー」と申しました。ハイカラな知識人だったのです。

私は一度、縁側に両手を掛けてそこから祖父の部屋の中を覗いた事があります。壁には額が掛っており次のような事が書いてありました。

正八位に叙する

昭和二十年二月十五日

宮内大臣 松平恒雄宣

祖父は、後年よくこの部屋で新聞の切り抜きや、若かりし頃の写真を整理したり、この額を見たりして過ごしておりました。老いよからの長い時間、祖父は何を想っていたのでしょうか。

第二話新居

二、新しい生活

平成二年八月初旬、ご主人様の家が完成し、私も大喜びで引越しました。

家の周りは右も左も田んぼだらけで、田んぼの先には土手に挟まれた小川が流れております。その川沿いの土手道の付近はうっそうとした竹藪に覆われており、少し行った先の雑木林の中にはコケが生えた大木がありました。はびこった枝が四辺り一面を一層暗くしていました。その大木の真ん中付近には小さな窪みがあつて、誰の仕業か小石が二、三個無造作に投げ込まれていました。ここは、陽の光を反射する川面と相まって精霊が棲んでいるような神秘的な雰囲気醸し出しています。

その川沿いの小道を歩いて行くと、その先に不気味な教会のような建物があり、その手前には石を積んだ垣根がありました。小さな橋のたもとから、この石垣の手前までがご主人様と私の散歩コースとなりました。

新居は二階が住居、一階が事務所となっており私は玄関の土間に古毛布を敷いて生活することとなりました。

ここは、田んぼの中の一軒家ですので夜は真つ暗になりますが、そのせいか月が出ると妙に明るく感じるので。真夜中の事でした。聞きなれない足音が道路の南西の方角から庭先に侵入してきたのです。私は警告の意味で二回吠えました、ドア越しに耳を澄ませますと、侵入者はひるむことなく駐車場付近まで進みゴソゴソとうごめいています。きっと泥棒か、ひよつとしたら不審者が放火しようとしているかも知れません。私は恐怖で狂ったように吠えまくりました、ドアに跳びかかりました。が首輪に付けた綱が邪魔をして一回転

するとそのままひっくり返ってしまいました。

「ご主人様が寝ぼけた顔で降りてきて、「トモ、静かにしなさい。今、何時だと思っっているのだ」と言いながら私の指さす窓の外に目を向けました。その瞬間、ご主人様は固まってしまい「この野郎」と声にならない声を発し外へ飛び出そうとしました。がしかし、ド近眼のご主人様は眼鏡を掛けていなかったのです、メガネ・メガネと二階に駆け上がります。「ご主人様僕の綱を解いて下さい、僕が泥棒を捕まえます、早くしないと逃げてしまいます」私は必死になって吠え続けました。ご主人様は二階から降りてきて「トモ、自転車が無い、やられた、どっちに行った」と完全に取り乱しており「姿が見えない、クソ、車で追いかける」と早口にまくし立てたかと思ったら自動車に飛び乗り、南西の方向に走って行きました。「ご主人様、そちらは町の方角です、泥棒は北西の山のほうへ逃げました。そちらは反対の方向です、あー何ということでしょう」

暫くして奥様も恐る恐る二階から降りてきました。その時は既にご主人様はお戻りで、コップに一杯の水を飲み干すと、「誠に残念、惜しいところで取り逃がした」と独り言の様に呟いております。

奥様は安堵したかのように大きく溜め息をつく、「自転車、そんなものまた買えば良いのです。それよりも、泥棒にひどい事をされた方がもつと災難ではありませんか」と申しました。私も夢中だったので気が付きませんでした、超ド級に運動神経の鈍いご主人様の事ですから、奥様のおっしゃる事は誠に「ごもつともな事である」と何度も頷きました。

それからと云うもの、何処でどの様に間違えたのか、我が家にはどう猛な番犬がいると町内中に知れ渡り、一度も盗難騒ぎは起こりませんでした。

八月も過ぎ九月に入ると、朝晩めつきり涼しくなります。気が狂いそうになる蝉の声も一段落し、夜ともなると鈴虫やコオロギなどが鳴き出します。そして、初秋の宵闇よいやみはあやしく心を誘います。か

たくなに閉ざした心がこじ開けられ、闇の中に溶けだしていきます。虫の音に誘われて虚ろに、闇を彷徨い、やがて新しい生命を宿すのです。

気だるくて、ただただ気だるくて、虫の鳴く声に耐えるのでした。ご主人様は仕事に行き詰まると、気分転換のためか、よく散歩に出かけます。

その時のご主人様は気むずかしい顔をして、一言も喋りません。早足で歩いたかと思うと突然立ち止りブツブツと何やら呪文のようなことをつぶやいたりします。

川沿いの小道で立ち止まり、向こう岸の雑木林にある大木の盛り上がった根元あたりの暗がりを中心にみつめてみると、「この川を越えて向こう岸に行く事は叶わず、故にこちらの岸に帰ってくる事も叶わず」と大木は梢をザワザワと鳴らし、人間にはわかりませんが、この付近にはただならぬ気配を感じるのです。

境界線のようなこの川は何か特別な意味を持っているようで、ご主人様が問答をした後でしょうか、ふと気が付くと誰がいつ企てたのか、向こう岸に行くことを阻むかのように、今までには無かった転落防止用の白い柵ができていたのです。

何かの答えを探すような、苦悩に満ちた表情で川沿いの道をうろつき回るご主人様のお供をする私はとても気を使い、散歩から帰ってくるどぐつたり庭へ座り込んで、長い舌をへ口へ口出してしまいます。

奥様は、「御苦労さま、喉が渴いたでしょう冷たいお水を飲みなさいね」と笑顔で迎えてくれます。

奥様と私は、朝早くあたりがまだ暗いうちから散歩に出かけます。しばらく歩いて行くと東側の山肌はまだ真っ黒ですが、空はうつすらと明るくなってきました、山の向こうは朝日が昇っている事でしょう。真っ黒な山々の頂が輝きだすと、瞬く間に朝の光に包まれます。山々は深い緑に変わり、田んぼや小川、それに小さな家々も四辺り

一面黄金色に輝きだし、眠りから覚めた生命が伸びをして躍動し始めるのです。

奥様は惜しむことなく私を愛しました。近所では、「トモちゃんのおばさん」と呼ばれ、朝夕一緒に散歩する奥様と私の姿は元気で明るく、傍^{はた}から見ても微笑ましいものでした。

ところが、ご主人様は気性の激しい方で自己中心的な性格でした。仕事に夢中になると、奥様のことや家庭の事も顧みる事がありません。奥様はやさしくて、明るく社交的な人柄でしたが、この様な事で生きていくことが辛くなる時もあったようです。二階から静かに降りてきて寝ている私の頭をやさしく撫でながら、涙することもありました。私はその時は奥様の目をジッと見つめ、私も奥様と同じ気持ちになる様に努めました。

緩やかな時の流れの中で、二人の気持ちは融合し共に生きて行くこととする希望の光が差し込んでくるのです。

私は自分が何故犬の子なのか、時々理解できなくなる事がありました。

「僕はきつと人間の子で、魔法使いに犬に変身させられたのかも知れない。場所はきつとあの教会の様な建物の中だろう。ご主人様はそれを知っているので不機嫌に散歩をしたり、石垣の手前で引き返したりするのだ」

ある日決定的な事が起こりました。南側の掃き出しに続く土間から、事務所の中を覗いていた時のことです。ご主人様が「あいつは自分を犬とは思っていない、まるで人間の子供だと思っている」と奥様に話しかけました。驚いた事に奥様は否定せずニコニコ笑いながら「そうね、その通りね、可愛いわ」と申したのです。

私は「おとつと」と呟きながら抜き足差し足、急いで庭に逃げ出しました。「やはり」私は確信しました。「僕は、人間の子だ」

第三話散歩

散歩コースとは反対の北東に伸びる土手道は東側の山の根元まで続いています。

小高くなつたこの土手道の下は、うつそうとした竹藪に覆われており、川を覗き見る事は出来ません、サラサラと流れる水の音だけが、わずかに川が流れている事を知らせてくれます。

ご主人様と私は全くの気まぐれで散歩コースとは逆の、この道を歩く事があります。

人に会う事も滅多に無く、ご主人様はこの道の方が、気が楽になるのか、独り言もはつきりとした口調になり、誰かに語りかけているようにも見えます。

私も、草の中に鼻を突っ込んで隠れているバツタを驚かしたり、よその犬のオシッコがかかった幹の上からマーキングをしたりしながら、ご主人様の独り言を拝聴するのでした。

「さて、今日は何について論じようか」

この様に誰に話すでもなく喋り始めました。

『家』の男のもとに『家』の女が嫁いでくる。男は働きに出て妻子を養い、女は子を産み育て家庭を守る。

年月が流れ年老いた親は引退し、長男に家督を譲る、妻は『家』の嫁と呼ばれ家が、次の代に継承される。

老親は長男夫婦に介護されいずれこの世を去る事になる、『家』の葬儀として。

そして、『家』は先祖代々、子子孫孫にわたり繁栄する。

この話、とどのつまりは『家』に辿り着くわけだが、世の中、戦争などという愚にも付かない事をオツパジメ、全てを失った時『家』も消え失せてしまった。

父母の世代は灰の中から釘を拾い、そして家を建てたが『家』はついに戻らなかった。

戦争で無念にも命を落とした人々のように。

ところで、今の日本は八百兆円を超える財政赤字であると言われる。

行政サービスのカットも覚悟し、国民の一人一人が身の丈に合った生活をしなければならぬだろう。国家も四十兆円位の収支で帳尻を合わせなければ国家財政は破産してしまう。そうなれば、恐らく戦争が終わった時の、いやそれよりもっと悲惨な光景が目の前に現れることであろう。リーダーである政治家は、増税を避け借金を返済する覚悟を、国民に訴える事が出来るだろうか。

負けるという事が最初から分かっていた戦争を止められなかったように、自らの保身に終始し、破産するとわかっているも尚借金の山を築いていくのか、と考えると全く憂鬱な気分になってしまう。

こんな事を喋りながら持論に酔いしれ、気分が良くなったご主人様は一つ咳払をし、総理大臣になった気分です、せり出した腹を揺すりながら家路に着くのでした。私も綱から伝わってくるご主人様のご機嫌に、西郷ドンの犬みたいな気分です。

別れ

彼がここで暮らし始めて早十七年の歳月が流れました。

収穫の終わった田んぼは誠にさびしい風景であります。

春の田おこしから、シユロかき、田植え、草取り、収穫と、田んぼは生命の限りを投げかけます。

そして今は、粘土色の大地に稲株がブツブツ・ブツブツと規則正しく並んで、まるで羽根をむしり取られた鳥肌のように見えます、静かに、春が訪れるまで疲れた体をいたわる様に眠りについているのです。

真冬の寒い日が続きますが、庭先の陽だまりは予想以上に暖かく、彼はいつもの場所でお腹を上にして昼寝を決め込んでいました。

竹藪の方から、杖をついた二人のお婆さんが田んぼを横切ってこちらに向かつて来ます。寝ていた彼は見た事がないお婆さん達でしたので若干警戒し、おすわりの姿勢をとりました。

「トモはお前かな」

若い方のお婆さんが尋ねるので軽く頷き「あなた方は魔法使いのお婆さん？」

二人のお婆さんは口に泡を溜めながら交互に喋り始めました。

「心配はいらない、私たちは天使」

「そう、若い時は背中に生えた羽根で自由に空を飛び」

「美しく脂の乗った裸体は芸術だった」

「いつの頃か歳をとり、醜くなった肢体を衣で隠し」

「羽根も皺くちやになって飛べなくなつた」

「つまり老人天使という訳さ」

二人のお婆さんは顔を見合わせて楽しそうに腹を突き出して大声で笑いました。

若者の処へは若い天使が行き、老人の処へは老いた天使が行く。それが慈悲というもの。

真顔に戻った歳の多いお婆さんが申しました。

「お前の命日は、今年の二月十四日と決まった、その事を伝えにきたのじゃ。」

二人のお婆さんは、あの大木の根元にある出入り口から顔を出し、誰もいない事を確かめると、川を渡ってこちらに来たようです。

彼は戸惑いましたが、思わず人間語で叫びました。

「いやだ、死にたくない。僕はご主人様や奥様といつまでも此処で暮らしたい。」

犬が突然人間語を喋ったので二人のお婆さんは顔を見合わせてうるたえました。

暫くして、年の多いお婆さんが然も冷静さを装っているかのよう
に申しました。

「お前には重大な使命がある」

二人のお婆さんは付近に誰か人がいないか確かめるように、剥き出した大きな目玉でキョロキョロと大袈裟に辺りを見渡し、彼を説得するかのよう交互に早口で喋り始めました。

「今から話す事は誰にも喋ってはならん、よいな。」

「お前はお爺様を知っておるじゃろう、来年二月八日がお爺様の命日と決まった」

「この事は神様たちの会議の席上、全会一致で決まった事なので、もはや動かし難い事じゃ」

「そこで、お前が天国までの道案内の役をする事になった」

「このお役には一年の修行が必要であり、今年の二月十四日がタイムリミットである」

「一生懸命修行に励み、使命を全うしてもらいたい」

この様に申して二人のお婆さんは来た道に戻って行きました。

「人に会うと面倒じゃから今の内に戻りましょう」

「それが良いですね、それにしても誰があんな所に柵を作ったのでしょう」

西の空は夕焼けとなっております。遠くの山々に日が沈もうとし

ており、一日の終わりを告げる茜色のこの刻が一番侘しく感じられます。二人のお婆さんはピクニックから帰る子供のように足早に家路を急ぐのでした。

この事が夢か現つか、彼には理解できません、何か叫びたい気持ちでいっぱいでしたが、黙って二人の後ろ姿を眺めていました、いつまでも消えるまで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7638h/>

愛犬 トモ

2010年10月28日07時15分発行